〈研究ノート〉

アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察
―研究ノート３―

九 里 秀 一 郎 ※

要約

この論文はアウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する一連の考察の一つである。このノートでは第15巻22章から最終28章までを扱う。神とモデルの根本的な違い、子の誕生と聖霊の発出の違いが論じられる。多くの読者は、子と聖霊が生まれる違いを、「知解」と「意志」の類比から論ずる部分に驚くであろう。本論では、彼の理論の全体像を明らかにするため、第９巻から15巻にある議論を、よく知られた類比・隠喩・適合という神認識の方法から検討した。彼は感覚に由来する多くの三一性を精神に見出したが、それらは神の似姿では無かったと言う。これはパウロが聖書で語る罪の心理学的理解とも言え、人間の精神全体が神の隠喩である。また、聖書が人間の成長に応じて神を理解するように語るという指摘は、まさに適合の原型である。このように、彼の心理学的な三位一体論は信仰と理性が見事に調和しており、困難な状況にある人々を対象とする社会福祉の質の向上に大いに期待できるであろう。

キーワード　アウグスティヌス　三位一体論　キリスト教社会福祉

目次

１．序論
２．方法
３．結果
　３．１　精神の三一性モデルの限界
　３．２　子の誕生と聖霊の発出の違い
４．考察
　４．１　子の誕生と聖霊の発出の類比
　４．２　神理解の限界
　４．３　三位一体論と社会福祉の接点
　　（１）　愛の精神科学の可能性
　　（２）　愛の社会福祉学の可能性
５．結論

付録　「三位一体論」第15巻ノート３

※浦和大学　総合福祉学部

１．序論

本論は、アウグスティヌスの三位一体論[1]と社会福祉の接点に関する一連の考察の最終部分である[2]。三位一体論で論証されたことがらを検証し、信仰と理性の融合したキリスト教の視点に立って、三位一体論と社会福祉の接点を探る、他に類を見ない試みである。この研究ノート３では、第15巻ノート第５部「三位一体を見る[3]限界」（第22～28章）を扱い、精神の三一性モデルの詳細な検討、人間の神理解の限界が主に論じられる。

さて、神を認識する方法として、「どのようにして神は人間の言葉を用いて記述され、論じられるか。」という本質的な問いがある。現代の著名な神学者マクグラスは、この問いの答えとして「類比」、「隠喩」、「適合」が歴史的にあると言い、それぞれの説の代表にトマス・アクィナス、サリー・マクフェイグ、カルヴァンを挙げて説明している[4]。本稿では、アウグスティヌスの三位一体論が、この三つの方法を含んでいることを論ずる。以下はマクグラスの解説と論点である。

１）トマス・アクィナスは「類比の原理」を示した。私たちは日常的な世界と結びついている像や観念を用いて神を知ると言う。実際、聖書は神の類比を多くのたとえ話（寓喩）で描いている。アウグスティヌスは類比の対象として人間の精神を探求し、精神の三一性モデルを見出した。本稿では、特に子の誕生と聖霊の発出の違いについて、精神の三一性モデルが知解と意志の違いの類比として説明することを明らかにする。

２）サリー・マクフェイグは、比較された二つのものの「類似性」だけでなく「相違性」の両方から神を認識する方法として「隠喩」を論じた[5]。三位一体論では、「いくらかの類似において非常な不類似を見る[6]。」という表現がしばしばある。本稿では、アウグスティヌスの三位一体論では「類似性」だけでなく、神の似姿とは言えない多くの精神の三一性を「相違性」として探求している点から、神の隠喩となることを明らかにする。

３）カルヴァンは人間が神を知るプロセスとして「適合」と呼ばれる理論を展開した。私たちが神を知るには、神は我々の水準にまで降りてこなければならないという考え方である。人間の立場で言えば、子どもが成長に応じて物事を理解することが適合に対応する。聖書が語る多くの信仰の成長に関することがらは[7]、アウグスティヌスの三位一体論では精神の三一性の成長と捉えられることを示す。

本稿では、以上の点を視野に入れながら、第５部「三位一体を見る限界」について考察する。本研究の目的は、（１）アウグスティヌスの三位一体論の論証を確認すること、（２）アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点について考察すること、以上である。

２．方法

本稿では、これまでの研究ノートと同様の方法で「三位一体論」第15巻22～28章について26）～36）に分けて要約し、短い補足を書き足してノートを作成した。（付録１）それらを第５部としてまとめ「三位一体を見る限界」と題した。今回で、第15巻すべてが完了する。

論証は、従来通り要点を箇条書きにして確認した。第５部には、アウグスティヌスによる三位一体論の結論と言える内容も書かれているが、本稿では「三位一体を見る限界」という狭い視点で扱い、三位一体論の全体を論ずることは別の機会としたい。

３．結果

第５部では、三位一体論の限界性が論じられる。一つは、精神の三一性モデルについて、もう一つは、聖霊の発出に関する理解についてである。以下、この二点について要旨をまとめる。

３．１　精神の三一性モデルの限界

要約26）～29）では、神の三位一体と精神の三一性モデルの基本的な相違を論じる。

26）精神の三一性モデルは、一つのペルソナである人間の三つの機能に関するモデルである。三つの機能を用いる主体は一つであり、三つの機能それぞれが主体ではない。一方、神の三つのペルソナはそれぞれが主体であり、それらが不可分離的に一体である。この点が神の三位一体と精神の三一性モデルの根本的な違いである。

27）精神の三一性モデルは、神の三位一体の類比として似姿と呼んでいるに過ぎない。およそ神の三位一体とは比較にならないが、記憶が父に、知解が子に、愛が聖霊に、ある種の類似を見いだす。しかし、この三つの能力は人により様々で調和していない人も多い。私たちは、この精神の三つの機能において、おぼろに映った神を見るのである。

28）精神の三一性を信ぜず理解しない人々は、鏡を見ても鏡をとおして神を見ず、鏡が神の似姿であることを知らない。信仰を軽蔑するなら、たとえ本性を深く理解したとしても罰せられることになる以外、何も為し得ず、確実なものには到達しない。結局、彼らは罪の負債である悪によって促され、神の小羊に服従することになる。

以上の部分から、精神の三一性モデルと神の三位一体の相違点、類似点に分けてモデルの限界を整理すると以下のとおりである。

＜相違点＞

・三つのペルソナの神と、一つのペルソナの人間の類比はペルソナの数が違う。

・神の三つのペルソナは実体であり、人間の一つのペルソナの三機能とは形相[8]が異なる。

・精神の三一性が不揃いで一体性に欠けることが多く、三位一体の神には到底及ばない。

＜類似点＞

・精神の三一性モデルは、記憶が父に、知解が子に、愛が聖霊に類似している。

＜モデルの限界＞

・精神の三一性モデルによって神を理解することを神の似姿と言っているに過ぎない。

・精神の三一性モデルでは神を明瞭に理解できず、鏡におぼろに映った姿である。

・精神の三一性モデルを信じ理解しなければ、神の似姿を知ることができない。

・信仰がなければ精神の三一性モデルを理解しても何も為し得ず悪に促されるだけである。

ここでは精神の三一性が三位一体の神との比較において相違点と類似点を持つことが示され、同時にモデルの限界が明らかになる。類似点と相違点が明瞭となり、その限界が明らかになれば、精神の三一性モデルは類比としてだけでなく、三位一体の神の隠喩と見なすこともできそうである。三一性モデルの限界は、そもそも人間が神を知る限界に由来し、既に三位一体を探求する方法で論じた内容がここでも繰り返されている[9]。この点については考察で詳細に検討する。

３．２　子の誕生と聖霊の発出の違い

要約29）～33）では、三位一体の神において、子が誕生し聖霊が発出することに関して、「誕生」と「発出」の違いを論じる。

29）イエス・キリストに属する人々は、平和の座に据えられた時、聖霊が父から発出する光である真理を観るであろう。私は、この生でそれを見るのが困難であると思い十分に示すことができなかった。人間の人格に三位一体の似姿を確かに見出したが、一つの人格の三つの能力を三位一体のペルソナに適応することはできない。

30）父から子が生まれ、父と子から聖霊が発出する間の時の隔たりは存在しない。三位一体において固有の意味で聖霊と言われるのは父と子との霊である。聖書では、子が父のもとから聖霊を遣わすと言い、父が子の名によって聖霊を遣わすと言うので、霊は父と子の両者から発出すると教える。福音書には、イエスが復活して弟子に聖霊を吹きかけ、イエスから出た力が病気をいやしたと記されている。

31）キリストが復活後に地上で聖霊を与え、二度目は天から聖霊を与えたのは、私たちが二つの戒めに従って神と隣人を愛するようになるためである。父と子と聖霊の名によって洗礼を授けよとの言葉に三位一体が特に示されている。イエスが洗礼を受けたことは教会において洗礼を受けた者が聖霊を受けることを予知している。キリストは人間として聖霊を受け、神として私たちに聖霊を注ぐのである。私たちは、この賜物を受けることが出来るが他の人々に注ぐことはできず、神が彼らに聖霊を注ぐように呼び求める。

32）時間が存在する私たちの場合、意志が先ず発出し見いだされ、意志は目標において完成される。愛は、生みだす精神と生み出された知識とから、親と子からのように発出する。しかし、時間において何も始まらない場合、時間なくして子が父から生まれるように、父と子から時間なくして聖霊が発出することも理解しなければならない。聖霊を発出するのは父であり、聖霊が子からも発出することを子が父から受けられたと理解する。父と子の両者からの発出が聖霊に本質を与えるなら、聖霊を生まれたと言わないのは、生まれなかったのは父のみで二つの父があると憶測しないようにするためである。聖霊は、人々がよく用いる「元々あったもの」という表現が適している。子は父から生まれ、聖霊は父から原理的に発出し、時の間隔なくして父が子にそのことを与えた時、聖霊は父と子の両者から生まれたのではなく、父と子から共通に発出するのである。

33）共に永遠で等しく、不可分離的な三位一体において生誕と発出を区別することは極めて

困難である。主が「聖霊は父から発出する」と言う時、「聖霊は子からも発出する」と理解される。もし聖霊が父と子から生まれたとなれば道理に合わないので、父と子から発出すると言うのである。父が子に、子が父に聖霊を発出するのは、父と子がそれぞれの内に命を持つように同時である。聖霊も同様に命を持つのである。

要約34）は、三位一体論の理解がむずかしい読者への勧めの言葉である。議論ではないので、要旨ではなく著者の勧めの言葉をテキストから直接引用して以下にまとめる。

34）三位一体の理解に耐えられない人は、「聖書に見いだされることを信じ」、「祈りと問い求めと善き生きざまによって、信仰によって保持されているものを」、「見られ得る限り、精神によって見るように」努めなさい。「信じる人になるために先ず神の賜物によって照らされ」、「信じるものを、いつの日か見得るために」立ち上がりなさい。神の本性の理解は、人間の精神が「信仰の規則によって導かれるとき」練習となる。「神以外にこの精神よりも高く、そして精神を服従させ指導すべきものは存在しない。」

要約35）は、アウグスティヌスの告白である。ここも議論ではないので、結論の繰り返しを割愛し、主要な告白をテキストから直接引用して以下にまとめる。

35）私は神に「適しいことを少しも語らず」、「神の驚くべき知識」に「達することができなかったことを告白する」。「おお、我が魂よ」、「汝は何処にあると思うや」。「汝はたしかにあの旅籠屋にいるのを知っている。そこへあの善きサマリア人は強盗から多くの傷を受け、半死半生になっている人を見つけて運んだのだ[10]」。「たしかに汝は多くの真実なものを見たのである」が、聖霊が「父と子のある実体を共にする交わり」であることを「透明、明白に見るために、眼差しをそこに固着させることは出来ない」。「私は自分に不可能なことを知っている」。「それにも拘わらず、三位一体ご自身が汝に、汝の中にある三つのものを示されたのである。」「その三つにおいて汝は」、「至高の三位一体の似姿を認識する」。「わが魂よ、汝はそれをなし得た」。「勿論、人間の思惟に絶えずあらわれる物体的な類似の雲に囲まれて」、「十分な言葉で解明し得なかったし、また解明し得ない」。「真理を見ることができないという理由」が「無力にないとしたら」、「汝の邪曲（よこしま）のうちにこそ」原因があるのではなかろうか。「誰が汝の魂の疾患を癒し得るであろうか」。「この書を論議によらず、祈りを持って閉じたい」。

要約36）は三位一体論の最終節である。アウグスティヌスの祈りと共に、三位一体が明瞭であるとする聖書の言葉が示されている。祈りを割愛し、聖書の言葉を以下に列挙する。

a．彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。（マタ28：19－20）

b．聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。（申命６：４）

c．神が御子を遣わされた。（ガラ４：４、ヨハ３：17）

d．父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊。（ヨハ14：26）

e．父のもとから出る真理の霊が来るとき。（ヨハ15：26）

f．すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった

方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。（一コリ15：28）

要約29）～33）から三位一体に関する要点を整理すると以下のとおりである。

① 父から子が誕生し、父と子から聖霊が発出するのはすべて同時である。

② 三位一体の神において、子の生誕と聖霊の発出を区別するのは困難である。

③ 聖霊が父と子の交わりであることを明白に捉えることが出来ない。

④ 人間が言葉を発する時、記憶と知解と意志の三一性を認識する。

⑤ 人間の知解と意志の類比において、生誕と発出の違いを認識できる。

ここで注目すべき点は、三位一体の神においては、子の生誕と聖霊の発出を区別するのが困難であると言い（②）、一方の精神の三一性モデルでは、知解と意志の違いから生誕と発出の違いを認識できると言う点である（⑤）。この点については、考察でさらに検討する。

４．考察

４．１　子の誕生と聖霊の発出の類比

聖書では「子が生まれる」と言い、「聖霊は発出する」と言う。父と子と聖霊からなる三位一体において、子と聖霊の生まれ方の違いをどう理解したらよいのか。この一見些末に見えるような議論が第５部では詳細に展開される。この議論の評価は様々であるが[11]、筆者は人間の意志について極めて現実的な深い洞察を与える点で、アウグスティヌスの三一性モデルの卓越性を示すものだと考えている。以下にそのことを確認する。

アウグスティヌスは、聖霊が父と子から発するという聖書解釈に立つ。ただし、その理由は、父が聖霊を発出することを子は父から受け継いだという解釈である[12]。すなわち、父が聖霊を発するので、父と同じである子も聖霊を発するというのである。さらに、この聖霊は父と子の交わりであり、聖霊は私たちに賜物として注がれる愛であり[13]、この愛によって私たちは神と隣人を愛する[14]。以上が、アウグスティヌスの聖霊に関する基本的な理解である。

さて、アウグスティヌスは子も聖霊も父が起源ならば、聖霊も子と同様に「生まれた」と言ってもよさそうであると問う。しかし、聖霊が父と子から「生まれた」と言うと二つの父がいることになるので、すべての源である父は一つという三位一体の規則に合わない。それで、聖霊は「生まれる」とは言わずに「発出する」と説明する。さらに、誕生と発出は時間の経過を含んだ概念であるため、アウグスティヌスは時間の存在しない世界を導入した。当時、三位一体論を否定する者たちは、時間の経過に伴って存在するならば、生まれる前は存在せず、神の永遠性、不変性という規則に矛盾すると主張していた。アウグスティヌスは、神の世界は物質世界の時間、空間の概念と同様に考えてはならないという基本的な考え方に立ち、次のように説明した。

父は聖霊が彼から発出する根拠をご自分うちに持つように、子にも同じ聖霊が彼から発出するようにさせたこと、また、この両者は時間なくして生起すること、さらに聖霊が子からも発出することを子が父から受けられたと知解されるように、聖霊は父から発出すると言われることを知解して欲しい。もし子が持つすべてのものを父から受けるな

ら、聖霊が子から発出するということも父から受けられたのである。だが、そこでは私たちは前とか後とかという時間を考えてはならない。そこには全く時間が存在しないからである。

最後に、アウグスティヌスは子の誕生と聖霊の発出について、精神の三一性モデルにもとづく解釈を試みる[15]。モデルでは、父が記憶に、子が知解に、聖霊が記憶と知解をむすぶ意志または愛である。そうすると、子の誕生と聖霊の発出の問題は、知解がどのように誕生し、意志がどのように発出するかという問いに還元される。この点について、要約35）で次のように語る。

私たちの思惟は私たちが知っているものから形成されるのである。また、思惟する人の眼差しに、記憶が保持していたものに全く似ている思惟の似姿がある。この二つを、いわば親と子のように第三の意志あるいは愛が結合する。この意志は、誰もその本質や性質をまったく知らないものを意志しないから、思惟から発出する。しかも、意志は思惟の似姿ではなく、したがってこの叡知的なものにおいて、生誕と発出の区別が明らかになることをなし得る人は認識し見分ける。思惟において見ることと意志を持って欲求し、あるいは享受することは同じでないからである。

思惟とは、人間の「考える」という一般的な行為を示しており、「知解」とは、次のように真実なことを思惟することである[16]。

私たちが真実であると見出したものを思惟するとき、すぐれて私たちは知解すると言われる。そして、私たちはこの知解したものを再び記憶の中に置く。しかし、私たちが思惟したとき、まずこの真理を見出し、いかなる国語にも属していない内密な言葉が生まれるのは、私たちの記憶のあのより隠れた深みにおいてである。この内なる言葉は、潜在していた知解から、思惟によって顕在化する知解のようなものである。

知解は思惟の似姿として「内なる言葉」を生む。それが子の誕生の類比である。意志も思惟から生まれるが、その人間にもたらすもの（獲得するもの）は知解とは全く違う。「思惟において見ることと意志を持って欲求し、あるいは享受することは同じでない。」からである。知解が誕生し意志が発出することが、子が誕生し聖霊が発出する類比である。

アウグスティヌスは巻の最後まで、父と子の霊による交わりを十分に見えなかったとしながらも、精神の三一性モデルによって子の誕生と聖霊の発出の違いが理解できたと確信する。もし、私たちも同様に思うならば、人間の記憶と知解と意志の三一性モデルが神の類比としていかに卓越したモデルであることに気づくであろう。

４．２　神理解の限界

第５部は、モデルと三位一体の神を詳細に比較して、類似点、相違点を論じ、モデルの限界を確認している。もちろんモデルには限界がある。しかし、限界があるからと言って評価に値しないアイデアだと切り捨てるのはいささか短絡的である。むしろ、この限界に達した全体の議論を最初から振り返り、この限界に至った真理を注意深く探ることの方が有意義で

あろう。特に、以下の点を考慮すべきである。

ひとつは、論証方法に関する議論である。論証の方法については、第１巻の冒頭から第15巻まで検討が繰り返されている。最終的には、アウグスティヌスは自身の三位一体論で論じた方法以外は考えられないと結論付けている[17]。寓喩による以外、神を理解することは不可能であるという論証を行っているのである。

もう一つは、精神の三一性モデルを探求する段階で見出された多様な精神の三一性である。それらは神の似姿とは言えない三一性として、第９巻から14巻において注意深く論じている。これらの一見無駄のような議論は、逆にアウグスティヌスの三位一体論がいかに優れたものであるかを示す。以下にその点を確認する。

第１巻１節冒頭では、神を考える時の一般的な誤りを三つの病として指摘する[18]。①物体について考える仕方で神を考える人々の病、②魂のような霊的な被造物について考える仕方で神を考える人々の病、③物体にも霊的な被造物にもよらないが、しかも神について誤ったことを考える人々の病、以上の三つである。最初の二つは、神を物体のイメージで捉え、あるいは霊魂のような目に見えない精神的存在と考えることである。これらは類比とは異なり、神を被造物の世界に存在する実体と考える誤りである。三つ目は、自分を神の子と思う妄想の様に、あり得ないことを勝手に考える誤りである。神は被造物ではなく、想像の産物でもないことが最初に宣言される。

続く２節では、聖書が神について人間の言葉で書かれていることを論じている。例として、「あなたの翼の陰に隠してください。」（詩17：８）、「わたしは熱情の神である。」（出20：５）を挙げている。聖書は神について語るとき、物体的なものから採られた言葉を用いており、神が羽根のある鳥、熱情の人間というのではなく、そのように語られるのがふさわしいという意味である。聖書を比喩的に読まなければ、神を正しく知ることができないことを宣言している[19]。

続く２節では、聖書は「段階的に」、「一歩一歩」、「育まれたもののように」読む者の知解力が立ち上るように書かれていると、次のように語る。

> **聖書はよく、被造物において見出されるものによって、いわば幼子にふさわしいたのしみをかたちづくり、それによって弱きものたちの情態を、その分限にしたがって、あたかも一歩一歩より高いものを問い求め、より低いものを捨て去るように促すからである。（１：１：２）**

聖書は読む者の年齢や能力に応じて神の知識を与える[20]。神を知ることは、聖書を読む人の条件によって異なるという宣言である。序論に示したカルヴァンの「適合」に相当する概念をここに見ることができる。

第５巻冒頭では、アリウスへの反論に先立って神自体を言葉では表せないことを次のように語る[21]。

> **いかなる人も、三位一体なる神について思惟する時、思惟するお方には全く似ていないことを知り、そのお方をあるがままに理解しないのである。パウロすら「鏡におぼろ**

に映ったもの」（一コリ13：12）を見るのであるから、私たちはどのような言葉でも相応しく表すことはできないであろう。

これは、神を人間の言表で言い表すことはできないという宣言である。第15巻４～９章では、さらに詳細に議論があり、信じるものを言表で言い表すことはそもそもあり得ないと論じている[22]。

第９巻から14巻では、アウグスティヌスが独自に掲げた「愛する人　愛されるもの　愛」という三一性の構造を聖書と人間に探求する[23]。三一性とは、三つの独立した要素が相互に関係し一体的に働く一般的な性質を意味し三位一体とも表現する。しかし、父・子・聖霊の三位一体と混同するので、一般的な三位一体を本論では三一性と書いている。第15巻の初めにあるまとめによれば、人間の精神に見られる三一性について検討された項目は以下の通りである[24]。

第８巻　愛する人　愛されるもの　愛
第９巻　精神・知・愛の三一性
第10巻　記憶・知解力・意志の三一性（内なる人・外なる人の三一性）
第11巻　視覚と物体的なものを結ぶ三一性（物体と結びつく三一性の問題点）
第12巻　知恵と知識の三一性の違い（外なる人と内なる人の境、性の理解）
第13巻　幸福と信仰（外なる人から内なる人に向かう三一性）
第14巻　知恵とその知識とその愛の三一性（神の似姿としての三一性）

聖書でパウロが用いる「内なる人」、「外なる人」という用語を第10巻から使用する[25]。物体的・時間的な知識に由来する三一性は、罪の奴隷[26]の状態に対する心理学的類比と言える。一方、知恵と、それに由来する知解と愛からなる三一性が神の似姿であるということは、「内なる人」の心理学的類比と言える。注意すべきことは、アウグスティヌスはこれらの議論の結論が、神を観ることが不可能であると語る点である。「第９巻から第14巻は、私たち自身もそうである被造物のところに『目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができる。』（ロマ１：20）ために知解力を修練したが、神なる三位一体を観ることは不可能である[27]。」

確かに、「外なる人」の心理学的類比は、神を観る限界を私たちに痛切に自覚させる。しかし、アウグスティヌスは、主の姿に造りかえられていく希望を次のように語る[28]。

けれどもパウロほどの偉大な霊的な人が「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。」（一コリ13：12）と言っている。もし、私たちがこの鏡とはいかなる性質のものか、また何であるか、ということを問い求めるなら、たしかに鏡において見ているものは似姿に他ならないことに気づく。同じ使徒は、このことを次のような言葉で意味表示している。「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」（二コリ３：18）だから、私たちは私たち自身でもあるこの似姿によって、あたか

も鏡をとおしてのように、私たちを創られたお方を何とかして見ようと努めているのである。

この希望が、記憶と知解と意志の成長において「主と同じ姿に造りかえられていく」ならば、「適合」の思想は、「類比」・「隠喩」と同じように、神理解に不可欠な要素である。アウグスティヌスの三位一体論は、人間の神理解の限界を明らかにした。その上で、神を見る希望を、人間の精神の類比、隠喩、適合によって現実化したのである。

４．３　三位一体論と社会福祉の接点

（１）愛の精神科学の可能性

アウグスティヌスの三位一体論は、キリスト教信者の信仰を深めるのに大いに役立つ。しかし、この書物はそのために書かれたのではない。三位一体論の冒頭に書かれているように、三位一体の神の論拠を提示するのが目的である[29]。信仰は個人の主観に大きく影響するが、客観的な事がらを根拠とする理論的な信仰理解は神学と言われる。アウグスティヌスは、信仰的なことがらと理性的なことがらを注意深く分離して論じており、三位一体論は信仰の書であると同時に神学書である。精神の三一性モデルは人間の精神の働きについて多くの事実について検討を重ねた論理的な考察であり、心理学的三位一体論と評されている[30]。

アウグスティヌスは人間の記憶・知解・意志の３機能に統一的な働きがあることを論じた。この精神の三一性は、親がわが子の優れた記憶力、優れた理解力、優れた意志の力に関心を持つように、たいへん身近である[31]。記憶力、理解力と意志の働きに違いのあることは容易に想像がつく。アウグスティヌスは、精神の三一性における知解と意志の違いを論じて、聖書にある子の誕生と聖霊の発出の違いを解釈した。その論証は実に巧みであり、精神の三一性モデルが、三位一体論を理解する上で、いかに優れているかを知ることができる。

精神の三一性モデルは、人間の善悪を非常に明快に説明する点でも精神科学的である。アウグスティヌスは、パウロのように人間を「外なる人」、「内なる人」に区分して説明する。「外なる人」は物質的・時間的知識からなる三一性を持ち、「内なる人」は知恵と愛からなる三一性を持つ。私たちは、毎日が物質的・時間的に追われているので、この「外なる人」を実感できる。「内なる人」は、私たちが切に求めているものであり、「外なる人」と異なることも経験的に知ることができる。

このように、アウグスティヌスの精神の三一性モデルは客観的な精神科学の面がある。しかし、これを精神科学と呼ぶことに躊躇する人も多いであろう。本論では、「愛する人　愛するもの　愛」を愛の原理と呼び、彼の思想が愛の原理から生まれたものであることを示した。愛の原理を前提とする精神科学が、果たして科学と言えるかという問いがある。記憶・知解・意志の一体的機能を精神科学的に説明しているに過ぎないとも言える。愛は科学にはなじまないという主張も確かに理解できる。しかし、古代末期のアウグスティヌスが愛を精神科学の世界にまで広げて考察したことの意義は大きいと考える。

（2）愛の社会福祉学の可能性

「愛の精神科学」と同様に、「愛の社会福祉学」の可能性も考えられる。もちろんこれも客観的な科学にはならないと主張する人も多いであろう。ましてや、精神の三一性モデルは個人が対象であり、人間集団である社会を対象としていない。三位一体論は社会科学とはまったく関係が無いと主張する人もいるかもしれない。

しかし、アウグスティヌスは隣人への愛について深い洞察を行った。隣人愛は社会への愛につながるのである。特に、アウグスティヌスはパウロがアテネのアレオパゴスで異邦人に行った説教をしばしば引用して論じた。使徒言行録にある以下の部分である。

> **実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。皆さんのうちのある詩人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおりです。（使17：27－28）**

本論では、この部分について愛の原理による理解を試みた[32]。そこで述べたように、アウグスティヌスは「神の中に生き、動き、存在する」という部分を、「私たちは、善の中に生き、動き、存在する。」と語る。「善」を「命」にも置き代える。さらに「私たちは創造主においてこそ生き、動き、存在する。」あるいは「精神は神の中に生きる。」とも語る[33]。

アウグスティヌスがこのように語るのは、たとえ異教徒でも信仰者としては同じであることを示すだけではないと思う。異邦人へ福音を伝えるには、隣人への愛が優先することを示したのではなかろうか。パウロが「たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。」（一コリ13：２）と語るのと同様である。

本論では、愛の原理において、「善の愛」、「命の愛」を「共通の愛」として理解した。すなわち「愛する人々　愛される人々　共通の愛」という考え方である。筆者は、このような考え方から愛の社会福祉が生まれるように思う。思想的には「愛の社会福祉学」とも言うべきもので、それこそキリスト教社会福祉学の目指すものであろう。キリスト教と社会福祉の接点は、信仰と理性に基づく神の探求、及び愛に根差した社会福祉の実践にあると考えている。

５．結論

アウグスティヌスの三位一体論は、三位一体の神の心理学的類比である。スイスの著名な神学者カール・バルトによれば、人間が三位一体の神を理解する限界であると評するほど優れた神学である[34]。私たちは三位一体の神において「子の誕生」と「聖霊の発出」の違いを見ることはできないが、子を知解、聖霊を意志とする精神の三一性モデルによって、知解が生まれ意志が発出する違いを実感できる。

一方、アウグスティヌスは、精神の中に物質的・時間的なものに由来する様々な好ましくない精神の三一性を見出した。それらは聖書の語る罪の心理学的な類比である。その結果、精神は神の類似点だけでなく相違点の両面を持つことが明白になり、精神の三一性モデルは神の隠喩となる。

さらに、人間が神を理解できるように神が人間に適合するという信仰について、精神の三一性モデルは私たちに容易に理解させてくれる。人間の記憶と知解と意志は成長に応じて発達し、知恵が増せば神をより知ることができるからである。

この様に、アウグスティヌスの三位一体論は、聖書に記された神と人間の精神を対比させ、類比・隠喩・適合によって、難解な三位一体の神を私たちに身近なものにさせてくれる。本稿では、このような信仰と理性にもとづく神の探求が、キリスト教的な人間理解を深め、愛の原理に根差した社会福祉の可能性を拓くことを明らかにした。

凡例

・「三位一体論」テキストの引用は、巻・章・節をコロンで区切り（　）内に表示した。例えば（10：１：１）は「三位一体論」第10巻第１章１節を意味する。連続する節を引用する時はハイフンで開始と終了を区切り、第15巻に限定される時は章・節のみ表示した。
・本文で「三位一体論」テキストまたは付録本文を引用する時は二字下げて太字とした。
・聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用した。引用は書名略語に続いて章と節をコロンで区切り（　）内に表示した。例えば（ロマ１：１）は「ローマの信徒への手紙」第１章１節を意味する。複数の連続する節の引用はハイフンで開始と終了を区切った。
・引用文献はすべて参考文献として一覧表に示し、通し番号を［　］で示した。例えば［１］p.10-12は、参考文献［１］の10頁～12頁を示す。

引用文献・注

１　［１］：本研究では、1975年に出版された中沢宣夫氏による日本語訳を使用した。
２　［２］、［３］：既に公表されている二つの研究ノート［２］、［３］を「研究ノート１」、「研究ノート２」、本稿を「研究ノート３」と略記する。各研究ノート付録にある三位一体論15巻の要約を、それぞれ「付録ノート１」、「付録ノート２」、「付録ノート３」と略記し、引用する要約番号に続いて、三位一体論の該当する巻、章、節を凡例の規則に従って記す。
３　三位一体論では「見る」と「観る」について、前者を「判断する・評価する」、後者を「眺める・鑑賞する」という具合に使い分けており、本稿も同様である。
４　［４］：p.347-356　第８章「哲学と神学」神学的言語の本性
５　隠喩（いんゆ）：「比喩法の一。『…のようだ』『…のごとし』などの形を用いず、そのものの特徴を直接他のもので表現する方法。『花のかんばせ』『金は力なり』の類。暗喩。隠喩法。メタファー。」（デジタル大辞泉）という説明が一般的である。マクグラスは「類比と隠喩との間の相違が持つ正確な性質については議論が続いている。」として、「隠喩」をサリー・マクフェイグが神学論文［５］で論じた意味として用いる（［４］p.351-353）。「父なる神」を例に、「隠喩は比較された二つのものの間の類似性と相違性の両方を表す。」とする。本稿も同じ意味で用いる。ただし、類似性に関する一連の議論と相違性に関する一連の議論の総体を神の隠喩という形で論じる。アウグスティヌスは「寓喩」について論ずる中で（研究ノート１　３．３）、「これには、別の意味が隠されています。」（ガラ４：24）、「鏡におぼろに映ったもの」（一コリ13：12）を引用して

いる。これらは、聖書における隠喩の概念と言えるであろう。（付録ノート１：９）９：15－16）

6　付録ノート２：24）20：39

7　パウロは「わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです。いや、今でもできません。」（一コリ３：２）と、信仰の成長について語っている。

8　付録ノート２：16）16：25－26、精神の３機能は人間が使用する道具であり、それぞれが主体的な実体では無いという意味である。

9　研究ノート１：３．３「三位一体を探求する方法」の論証

10　ルカ10：30－34

11　研究ノート１：注20、矢内原は彼の著書「三位一体論」で、誕生と発出の議論は哲学的な完全性に執着し過ぎていると批判する。心理学的三位一体論については様々な後世の評価があり、文献［４］に一部紹介されている。

12　付録ノート３：32）26：47

13　付録ノート２：23）19：37

14　付録ノート３：31）26：46

15　付録ノート３：35）27：50

16　付録ノート２：25）21：40－41

17　付録ノート１：１）１：１

18　１：１：１

19　研究ノート１：注30、31、40

20　「乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人のためのものです。」（ヘブル５：13－14）他に、一コリ13：11なども同様。

21　５：１：１

22　研究ノート１：３．３

23　付録ノート１：６）６：10

24　付録ノート１：３）３：５

25　パウロは「たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」（二コリ４：16）、「肉の人、霊の人」（一コリ３：１）と語り、アウグスティヌスの「外なる人」、「内なる人」とは正確には異なる。

26　「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。」（ロマ６：６）

27　付録ノート１：６）６：10

28　付録ノート１：６）８：14

29　１：１：１－３

30　研究ノート１、２：序論

31　研究ノート１：注11

32　研究ノート２：４．３

33　14：15：21：［　］は、テキスト訳者が付した。

34　研究ノート１：注22

参考文献

［1］アウグスティヌス，中沢宣夫訳．三位一体論．東京，東京大学出版会，1989，540p.
［2］九里秀一郎．“アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察：研究ノート１”．浦和論叢．Vol.54，2016-2，p.33-61（2016）
［3］九里秀一郎．“アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察：研究ノート２”．浦和論叢．Vol.55，2016-8，p.1-29（2016）
［4］マクグラス，Ａ・Ｅ・神代真砂美訳．キリスト教神学入門．東京，教文館，2002，804p.
［5］McFague, Sallie. Models of God: Theology for an Ecological, Nuclear Age. Philadelphia, Fortress press, 1987, 224p.

付録

「三位一体論」第15巻ノート３

目　次

第１部　第１巻から14巻で証明した真理（第１～３章）

１）動物より優れた魂の特性を持つ人間が神の似姿であることを論証する。（１：１）

２）論究を積み重ねて人間の精神に神を求めることに到達した。（２：２－３）

３）第１巻から14巻で証明されたこと。（３：４－５）

第２部　三位一体を探求する方法（第４～９章）

４）創造主に対する信仰告白。（４：６）

５）神に対する言表がすべてのペルソナに当てはまるか調べる。（５：７－８）

６）神に対する言表の考察を経て人間の精神の内に三一性を見出す。（６：９－10）

７）人間の精神に神の似姿を見出すが人間は神の知識に到達できない。（７：11－13）

８）パウロの言葉「鏡におぼろに映ったものを見る」を解釈する。（８：14）

９）「鏡におぼろに映ったものを見る」とは寓喩である。（９：15－16）

第３部　三位一体から生まれる言葉（第10～16章）

10）心の中で思うことは神の御言と類似している。（10：17－19）

11）私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。（11：20－21）

12）私たちの真実な言葉は記憶の宝庫から生まれる。（12：21－22）

13）神は創造する以前から創造するものを知っている。（13：22）

14）父から生まれた御言葉と私たちの内的に語る言葉は似ている。（14：23－24）

15）内的な言葉はある種の精神に存在する旋回的な運動から生まれる。（15：24－25）

16）神は人間のように思惟から言葉を生むのではない。（16：25－26）

第４部　三位一体の愛（第17～21章）

17）聖霊が愛なる神である。（17：27－31）

18）完全な信仰を持っていても愛が無ければ無に等しい。（18：32）

19）聖霊が神の賜物であることを聖書は水に例える。（19：33）

20）主は人々に賜物を与え、人々の内で贈り物を受け取る。（19：34）

21）聖霊は異邦人に注がれる。（19：35）

22）聖霊の賜物は聖霊であり、聖霊を与えられたものと神との一致がある。（19：36）

23）聖霊は神であり、固有の意味で愛と言われる。（19：37）

24）精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。（20：38－39）

25）意志または愛は記憶と知解に由来する。（21：40－41）

第５部　三位一体を見る限界（第22～28章）

26）一つの人格にある三機能は、三つのペルソナの一体とは違う。（22：42）

27）私たちの三つの能力が神の似姿であり神を見ることができる。（23：43－44）

28）精神の三一性を信じること。（24：44）

29）鈍くても、キリスト・イエスの救いが得られる。（25：44－45）
30）父と子とから聖霊が発出する。（26：45）
31）イエス・キリストは神性において聖霊を与え人間として聖霊を受けられる。（26：46）
32）時間なくして子は父から生まれ、同時に父と子から聖霊が発出した。（26：47）
33）三位一体において生誕と発出を区別するのは難しい。（27：48）
34）精神によって神を見るように努めなければならない。（27：49）
35）わが魂の眼ざしは罪のゆえに真理を見ることはできない。（27：50）
36）この書に書かれたものが主に由来することを祈る。（28：51）

注：ノート３は第５部のみ収録、要約部分は２字下げて太字とした。

第５部　三位一体を見る限界（第22～28章）

26）一つの人格にある三機能は、三つのペルソナの一体とは違う。（22：42）

人間の精神にある記憶、知解、愛と三位一体の神の三つのペルソナとの違いを語る。

この三つの能力は人間の場合のように一つの人格の中にあるとき、「この記憶、知解、愛、の三つは私の有であるが、それら自身の有ではない。それらがなすものはそれら自身のためになすのではなく、私のためになすのである。然り、私がそれらをとおしてなすのである。」と言い得る。なぜなら、私が記憶によって想起し、知解によって知解し、愛によって愛するからである。私が思惟の眼差しを私の記憶に向け、かくして、私が知っているものを、私の心において語り出し、そして真実の言葉が私の知識から生まれるとき、私の知識と言葉は両方とも私の有である。私が知るのである。私が知っているものを私の心において語るのである。私が、私の記憶において、すでに知解し、私がすでに或るものを愛しているということを思惟によって確認するとき―知解と愛は私がそれを思惟する前にそこに存在していたのである―、そのとき、私は私の記憶において私の知解と私の愛を見出す。それらによって、私が知解し愛するのであって、知解が知解し、愛が愛するのではない。

同じように、思惟が想起し、記憶の中に置かれているものに帰還しようとして、それを知解して見、そして内的に語り出そうとするとき、私の記憶によって想起し、私の意志によって意志するのであって、思惟の記憶や意志がそうするのではない。さらに私の愛も、欲求すべきもの、回避すべきものを想起し知解するとき、私の記憶によって想起するのであって、愛の記憶によってではなく、私の知解によって知解において愛するものを知解するのであって、愛の知解によってではない。

それゆえ簡潔に次のように言い得る。この三つの能力すべてによって、私が、想起し、私が、知解し、私が愛するのであって、この私は記憶でも、知解でも、愛でもなく、これらを所有しているのである。だから、この三つの能力は、それらを持ち、それらでは

ない一つの人格である私によって語られ得る。これに反して、神なるあの至高の単純な本性においては、もちろん、一つの神ではあるが、御父、御子、聖霊という三つのペルソナが存在する。

人間の三一性と神の三位一体性の違いを明らかにしている。記憶、知解、愛の三つの能力がひとつの人格にある時、この三つはばらばらに存在しているのではなくひとつの人格のために機能する。しかし、神はひとつの神であるが、父、子、聖霊という三つのペルソナが存在するという点でまったく異なる。

27）私たちの三つの能力が神の似姿であり神を見ることができる。（23：43－44）

人間の精神にある三一性が神の似姿であり神をおぼろに見ることができると語る。

したがって、ものそのものである三一性と他のものにおける三一性の似姿とは別である。この似姿のために、あの三つの能力を持つものも似姿とよばれるのである。それは丁度、書板とそれに描かれているあるものとが共に似姿とよばれるようにである。しかし書板はその上に描かれてあるものによって似姿という名称を持つ。ところが、万物の上に比類なく卓越しているあの至高の三位一体の場合には、人間が持つ三一性は一つの人間であるとは言われ得ないのに、神の三位一体は一つの神であると言われるし、また、一つの神であり、しかも、この三位一体は一つの神の中にあるのではなく、一つの神御自身であるというほどに三つのペルソナは不可分離的である。

さらにまた、三つの能力を持ちながら一つのペルソナである人間としての似姿のように、この神の三位一体は一つのペルソナではなく、三つのペルソナ、つまり子の父、父の子、父と子との御霊である。人間の記憶、そしてすぐれて、動物が持たない記憶、言い換えると、その中に叡智的なものが身体の感覚によっては到達できないように包含されている記憶は、この神の三位一体の似姿において、それに相応に、当然比較にならぬほど等しからずとは言え、御父との或る種の類似を持っているのである。

同じく、私たちが知っているものを語るとき、そこから思惟の志向によって形成される人間の知解力は、いかなる国語にも属さない心の言葉であり、勿論、遥かに隔たってはいるが、御子との或る種の類似を持つのである。知識から発出し、そして記憶と知解を結合し、いわば親と子に共通な、しかし親でも子でもない人間の愛も、はなはだしく等しからずとはいえ、この似姿において聖霊の或る種の類似を持っている。

しかも、この三位一体の似姿において、この三つの能力は一人の人間そのものではなく、一人の人間の有である。そのように、あの至高の三位一体御自身においては、あの三つの能力は一つの神の有ではなく、一つの神であり、また、それは一つのペルソナではなく、三つのペルソナである。三位一体のこの似姿が一つのペルソナであるのに、至高の三位一体御自身が三つのペルソナであるということは、たしかに不可思議にして言い難く、あるいは言い難くして不可思議なことである。三つのペルソナの三位一体は一つのペルソナの三一性よりも一層、不可分離的なのである。

神性の本性において三位一体は真実に存在するものである。この神性は各ペルソナの間で変化なく、常に等しい。それは存在しなかったことなく、また別様にあった時もなかったのである。また、存在しなくなるであろう、あるいは別様に存在するであろう時は存在しないであろう。しかしながら、三位一体の不完全な似姿の中にある三つの能力は物体ではないから、場所的に分かれているのではないとしても、この現在の生において相互に大きさによって分離している。なぜなら、そこには、いかなる集塊も存在しないが、それでも私たちは或る人においては、知解力よりも記憶力の方が大きく、他の人においてはその逆であり、また或る人においては、この二つが等しくあろうが等しくなかろうが、この二つの能力が大きさにおいて愛に凌駕されるのを見る。そのように、二つは各個よりも、各個は二つにより、各個は各個により、小さいものは大きいものに凌駕される。すべての疾患から癒されて、互いに等しくなるとき、恩恵によって、もはやいかなる変化も蒙らないものも本性的に変化しないものに等しくされないであろう。それは、被造物は創造主に等しくなく、そして被造物はすべての疾患から癒されるときも変えられるであろうからである。

しかし非物体的であるだけでなく、最高に不可分離的であり、真に変化しないこの神の三位一体を、「顔と顔とを合わせて」（一コリ13：12）私たちに約束されている神直視が訪れたとき、私たちの現在の状態を示すこの似姿よりもずっと明らかに確実に見るであろう。しかも、「鏡におぼろに映ったもの」（一コリ13：12）として、この生において見ることが許されている限り、見ている人々は、私たちが詳論し提示したあの三つの能力を、その精神において認める人々ではなく、その精神を、いわば似姿として見る人々であり、そのようにして彼らが見るものを、精神がその似姿であるお方に或る仕方で関係させ得るのである。そして彼らが認めることによって見る似姿をとおして、予感することによってではあるが、神を見得るのである。まだ、「顔と顔とを合わせて」神を見ることはできないからである。実に、使徒は、「わたしたちは、今は、鏡を見ている」と語るのではなく、「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている」と語るのである。

一つのペルソナの三つの能力と、三つのペルソナが一体の神とは根本的に違うと言う前提で、二つの類比をまとめている。まず、人間の記憶と御父が類似していること、次に人間の知解力が御子と類似していること、最後に人間の愛が聖霊と類似していることを明確に述べている。さらに、被造物は創造主に等しくはないので、人間は三位一体の不完全な似姿のままであると語る。最後に、人間は人生に於いて見ることが許されている限りにおいて、三つの能力を神の似姿として見ることにより、神をおぼろに見ることができると語る。

28）精神の三一性を信じること。（24：44）

精神の三一性を神の似姿と信じることの信仰的な勧めである。第５部（第24～28章）は、被造物をとおしてではなく、聖書をとおしてのみ知る神について論じられる

だから、見られ得るだけ自分の精神を見、また、その精神に於いて私に出来るかぎり、多くの仕方で論じたあの三一性を見るが、しかも、その三一性が神の似姿であると信ぜず、また知解しない人々は、なるほど鏡を見ている。しかし今、鏡をとおして見られるべきであるお方を、鏡をとおして見ていないのである。彼らが見ているその鏡は鏡、言い換えると似姿であることを知らないのである。もしそのことを知っていたなら、おそらく彼らは、鏡をとおして問い求め、清い心と正しい良心と純真な信仰（一テモ１：５）によって悟るであろう。もし、心を清める信仰を軽蔑するなら、自分たちの知解力の証言によっても罰せられることになる以外、人間の本性について極めて鋭く論じられることを知解することによって何を為し得るのだろうか。彼らは罰のため暗闇に巻き込まれ、魂を抑圧する腐敗しやすい身体の重荷を担うのでなければ、たしかに知解において労苦しないであろうし、またほとんど或る確実なものに到達しないであろう。しかも罪の負債でないなら、いかなる負債によってこの悪を負わされるのであろうか。したがって、彼らはこのような大きい悪によって促されて、世の罪を取り除く神の小羊（ヨハ１：29）に服従しなければならないのである。

要点は次のとおり。人間の三一性を見るけれども、その三一性が神の似姿であると信じない人がいる。信じる人は神を問い求め、信じない人は罪の負債を担いイエス・キリストに服従することになる。

29）鈍くても、キリスト・イエスの救いが得られる。（25：44－45）

父から聖霊が発する三位一体の神の秘義を十分解明し得なかったが、不完全ながらも神の似姿を見出したことを語る。

この小羊に属している人々は、たとい素質の点で、遥かに鈍くあっても、この生の終わりに身体から解放される時、嫉み深い権能も彼らを拘留すべき権利を持たない。罪の負債なくして、あの嫉み深い権能によって殺されたこの羊は、血の義によって彼らを征服される前に、権能の力によって征服しなかったのである。そこで小羊に従う人々は悪魔の権力から解放されて、聖なる天使たちに受け入れられ、「神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとり」（一テモ２：５）によって、すべての悪から解放される。なぜなら、旧約と新約の聖書全体は、前者はキリストを預言し、後者はキリストを告知するのであるが、共に、「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」（使４：12）という点で一致している。すべての腐敗の感染から清められた人々は平和な座に据えられ、ついには再びその身体を受け取るようになる。祝福が終りなく持続するようになることは至善、至賢なる創造主の喜びたまうことである。

そこでは、私たちは真理をいかなる困難もなく見るであろう。また、この上なく明白に確実に享受するであろう。私たちは論証的な精神によってではなく、観想的な精神によって、聖霊が御父から発出する時、なぜ聖霊は御子ではないのか、を見るであろう。

この光にはいかなる問題の雲も存在しないであろう。しかしそのことはこの生においては、自らの経験そのものによって、困難であるように私には見えたのである。それは、疑いなく、私が書いたものを注意深く知解的に読む人々にとっても同様である。したがって、第２巻第３章で約束したように、私たち自身を含めて、あの被造物においてこの秘儀に似た或るものを幾たびか示そうとしたが、私の表現は私の貧弱な読み取り（知解）に十分に随いていかなかった。勿論、私はその知解においてすら成功した、と思うよりはむしろそのことを努めた、と思っている。たしかに、私は人間という一つの人格の中にあの至高なる三位一体の似姿を見出した。

また、より容易に知解され得るように、特に第９巻では、可変的なものの中に在る三つのものを、それらは時の間隔によって別々になっているが、示そうとした。しかし、一つの人格のこの三つの能力は、人間の志向が要求するようには、あの神の三位一体の三つのペルソナに適応することはできない。それは、私たちがこの第15巻で証明したとおりである。

素養の点でこの論考を知解できなくとも、イエス・キリスに従う人々はすべての悪から確実に解放され、終わりの時に創り主の喜びに与り、すべての真理を見る。聖霊が父から生まれたのではなく発出することの真理もその時分かるであろう。一つの人格が神の三位一体の三つのペルソナに適応することはできないけれど、私は神の似姿を人間に見出した。

30）父と子とから聖霊が発出する。（26：45）

聖霊について、三位一体論の基本的な考え方、聖書に意味表示されている最も基本的な証言をまとめる。

さらに、神なるあの至高の三位一体においては、先ず御子が御父から生まれ、次にこの御父と御子とから聖霊が発出したのかどうかを示し、あるいは少なくとも問い言えるようにさせるいかなる時の隔たりも存在しない。聖書は霊を父と子との霊、と語る。この霊については、使徒が「あなたがたが子であることは、神が、『アッバ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。」（ガラ４：６）と言っている。また霊について、御子イエスが、「実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。」（マタ10：20）と言われる。他の多くの神の言葉（聖書）の証言によって、三位一体において固有の意味で聖霊と言われるのは、御父と御子との霊であることが確かめられるのである。聖霊について御子は、「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。」（ヨハ15：26）と言われ、また他の箇所では、「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」（ヨハ14：26）と言われる。この二つの箇所から、霊は父と子の両者から発出する、と教えられるのである。御子自身も、「彼は父から発出する」と言わ

れる。また、御子は死人の中から復活し、弟子たちにあらわれたとき、息を吹きかけて、「そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」（ヨハ20：22）と言われ、したがって聖霊が御子からも発出することを示しておられる。また、聖霊は福音書の中で読まれるように、「イエスから力が出て、すべての人の病気をいやしていたから。」（ルカ６：19）である。

三位一体論による聖霊の理解について、（１）父と子と聖霊の３つのペルソナは父から子、聖霊の順に時間的に生まれたとは考えられないこと、（２）聖書には聖霊が父から発出する、子から発出する、いずれも明確に記されていること、以上を確認している。

31）イエス・キリストは神性において聖霊を与え人間として聖霊を受けられる。（26：46）

聖書に記されたイエス・キリストと聖霊の交わりについて信仰面から語る。

しかし、復活の後、キリストが先ず地上で聖霊を与え、「彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。』」（ヨハ20：22）と語り、次に、「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」（使徒２：４）と、天から聖霊を遣わされるというのはどうしてであろうか。私の考えでは、この聖霊という賜物によって私たちの心に愛が注がれ、この愛によって私たちは神と隣人を愛するようになるからである。それは律法と預言者全体が懸っているあの二つの戒め『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』と『隣人を自分のように愛しなさい。』（マタ22：37－40）によるのである。

主イエスは再度、聖霊を与えた。一度は地上において隣人の愛のために、二度目は天から、神の愛のために与えたのである。あるいは他の理由がこの再度の聖霊の授与のために考えられるとしても、イエスが少し後で、「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタ28：19－20）と言われて、彼らに息を吹きかけられたとき、同じ聖霊が与えられたことを疑ってはならない。このテキストは特に、三位一体について示されているものである。したがって、ペンテコステの日に、つまり、主が天に昇られた後十日目に、この聖霊が降臨することを祈った。聖霊を与えられるお方がどうして神でないであろうか。神を与える神は何と偉大であろう！

いかなる弟子も聖霊を与えることはなかったのである。「ペトロとヨハネが人々の上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。」（使８：17）とあるが、弟子が聖霊を与えたのではない。教会が按手の慣習を今も行っているのと同様である。魔術師シモンでさえ、「使徒たちが手を置くことで、“霊”が与えられるのを見、金を持って来て、言った。『わたしが手を置けば、だれでも聖霊が受けられるように、わたしにもその力を授けて

ください。』」（使８：18－20）と、聖霊を与える権能では無く、手を置いた人が聖霊を受ける権能を金で得ようとした。このゆえに主御自身が神として聖霊を与えられるだけではなく、人間として聖霊を受けられる。だから、聖書に主は恩恵（ヨハ１：14）と聖霊（ルカ２：52、４：１）に満たされていると語られているのである。使徒言行録では、もっと明らかに主について、「神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。」（使10：38）と記されている。これは教会のバプテスマを意味表示している。キリストのバプテスマについて、「イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。」（マタ３：16）という聖書の箇所では、聖霊によってイエスに油が注がれたのではなく、洗礼を受けた者が聖霊を受ける教会を予示している。この教会において、とりわけバプテスマされた者は聖霊を受ける。

神の御言が肉としてつくられた時、「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」（マタ１：20）とある。言い換えると、人間性が善き業の或る先行的な功績なくして、御言なる神に、彼と共に一つのペルソナが生じるように処女マリアの胎内で結合された時、私たちは聖霊と処女マリアからイエスが生まれたと告白する。そうすると、主が30歳くらいになられて、「イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」（ルカ３：21－22）という部分で、はじめて聖霊を受けるのはきわめて理に適わない。むしろ主がバプテスマを受けにヨハネのところに来られたとき、全く罪なくして聖霊を持っておられたと信じるべきである。主の僕、先触人（さきぶれびと）であるヨハネその人すら、「既に母の胎にいるときから聖霊に満たされ」（ルカ１：15）とあるので、ましてや霊的に懐胎した人間キリストを何と理解し信じるべきであろうか。「イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を父から受けて注いでくださいました。」（使２：33）とキリストについて語っていることに人間性と神性が示されている。たしかにキリストは人間として聖霊を受けられ、神として私たちに聖霊を注ぐのである。しかし、私たちは信仰の量りにしたがって、この賜物を受け得るのであるが、それを他の人々に注ぐことはできない。だが、私たちは彼らの上に聖霊が注がれるように神を呼び求める。神がこれをなすのである。

特にアウグスティヌス自身の考えとして次のことを語る。（１）イエス・キリストが復活の後、天に昇る前と後で聖霊を２回与えるのは、前者が隣人愛のため、後者が神の愛のためである。（２）イエス・キリストはバプテスマを受ける前にすでに聖霊によって宿っていたのであるから、イエスがヨハネのバプテスマを受けた後、聖霊が下る記事はバプテスマを受けた者に聖霊が下る教会を予示している。これらは、キリストは人間として聖霊を受けられ、神として私たちに聖霊を注ぐこと、一方、人間は聖霊を受けるが他人に与えることはできないことを確認している。

32）時間なくして子は父から生まれ、同時に父と子から聖霊が発出した。（26：47）

聖霊が父と子から発出することについて、聖書における三位一体の理解である。

それでは、聖霊は、御子が生まれたとき、御父からすでに発出したのか、それともまだ発出しなかったのか、また、子が生まれた後、父と子とから発出したのか、問い求めることはできるであろうか。時間が無いところで、この問いは意味を持つのであろうか。私たちは時間が存在する場合、意志が先ず人間の精神から発出し、かつ見出されたとき、子とよばれるかどうか問い求めることはできた。すでに生まれ、あるいは生み出されるとき、意志はその目標において憩いつつ、問い求める人の願望が、享受する人の愛になるように完成される。そして、愛は、この両者、言い換えると、生み出す精神と生み出された知識とから、いわば親と子とからのように、発出する。しかし、このようなことは、つづいて時間の中で完成されるため、時間において何も始まらない場合には問い求められない。それゆえ、時間なくして、子が父から生まれるということを知解し得る人は、父と子から時間なくして聖霊が発出するということをも知解しなければならない。「父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださったからである。」（ヨハ５：26）という子の言葉は、父は生命なくして存在している子に生命を与えられたのではなく、子が父に生誕によって与えられた生命が、それを与えた父の生命のように永遠であるというように子を時間なくして生んだのである。そのように知解し得る人は、父は聖霊が彼から発出する根拠をご自分うちに持つように、子にも同じ聖霊が彼から発出するようにさせたこと、また、この両者は時間なくして生起すること、さらに聖霊が子からも発出することを子が父から受けられたと知解されるように、聖霊は父から発出すると言われることを知解して欲しい。もし子が持つすべてのものを父から受けるなら、聖霊が子から発出するということも父から受けられたのである。だが、そこでは私たちは前とか後とかという時間を考えてはならない。そこには全く時間が存在しないからである。だから、時間の始めなく、本性の変化なく、父から生まれることが子に本性を与えるように、時間の始めなく、本性の変化なしに、父と子の両者からの発出が聖霊に本質を与えるなら、聖霊を父と子の子と名づけることは、どうしてこの上もなく理に適わないことでないであろうか。それゆえ、私たちが聖霊を生まれたと言わないとき、しかも彼を、生まれなかった、と言わないのは、このingenious[1]という語で、あの三位一体に二つの父、あるいは他のペルソナから由来しない二つのペルソナがある、と誰も憶測しないようにとの配慮による。それは父だけが他のペルソナから由来しないからである。従って、父のみが、生まれなかった、とよばれる。勿論、その語は聖書にあるのではなく、これほど深い真理について論議する人々がよく用いるものである。それは彼らの能力に適した表現である。さて子は父から生まれたのである。聖霊は父から原理的に発出し、いかなる時の間隔なくして父が子にそのことを与えた時、聖霊は父と子から共通に発出する。しかし、すべての健全な精神には不快なことではあるが、もし父と子が聖霊を生んだとするなら、聖霊は父と子との

子といわれるであろう。したがって、聖霊はこの父と子の両者から生まれたのではなく発出するのである。

聖霊が父と子から同時に発することの説明である。時間的な経過で意志が記憶と知解をむすぶことは、三位一体の似姿である人間の精神では理解できるが、時間的に不変な三位一体の神では意志が最初というような順序はありえない。不変な世界では、父から子が生まれるのも、父から聖霊が発出するのも、子から聖霊が発出するのも、時間的な変化に伴って起きるのではなくすべて同時である。聖書では子について「生まれる」、聖霊については「発出する」と表現して、子と聖霊が父に由来することを示している。その理由は、父だけが由来の無い存在とする三位一体論に混乱を生じさせないためである。

33）三位一体において生誕と発出を区別するのは難しい。（27：48）

前節と同様の内容を『ヨハネ福音書講解』でも示したことを紹介する。

しかし、あの共に永遠で等しく、非物体的な、言詮を絶して変わることなく不可分離的な三位一体において、発出と生誕とを区別することは極めて困難である。聖書の証言に準拠して、聖霊は父と子とから発出するということを私は『ヨハネ福音書講解』（99：８－９）でも次のように教示した。主が「聖霊は父から発出する」と言う時、「聖霊は子からも発出する」と理解される。それは、聖霊は御父から発出されるように、御子からも発出するということを受けるからである。なぜ「発出する」と言って、子と言わないのかと言えば、もし聖霊が生まれたと言うなら、父と子から生まれたとなり道理に合わないからである。父から子に聖霊が発出され、子から父に聖霊が発出するのは同時であって、ちょうど父がご自分の内に命を持ち、子にもご自分の内に命を持つようにである。父と子と同様に聖霊も命を持つのである。

子は父から生まれ、同時に聖霊は父と子から発出する。聖霊が父と子から「生まれる」とは言わないが、「生まれる」と「発出」の区別が難しいと語る。

34）精神によって神を見るように努めなければならない。（27：49）

理解力の無い人、信仰を持たない人を想定して語る。

しかし、もし彼らが被造物であるこの似姿を凝視するのに適しくないなら、神なる三位一体について人間の愚鈍にして無力な精神によっては耐えられない極めて透徹した根拠の説明が与えられることを望むより、むしろ聖書に見いだされることをなぜ信じないのであろうか。彼らが確かに聖書をこの上なく真実な証人として固く信じるなら、祈りと問い求めと善き生きざまによって、信仰によって保持されているものを知解するように、言い換えると、見られ得る限り、精神によって見るように努めなければならない。

だから、光は暗闇に照るのである。暗闇が光を捉えられないなら、彼らは信じる人になるために、先ず神の賜物によって照らされるがよい。そして信じない人に比して光であり始めよ。この基礎が前もって捉えられたとき、信じるものを、いつの日か見得るよ

うに、見るために立ちなさい。

実に、全然見られ得ないが、信じられるものがある。キリストは再び十字架において見られるべきではない。しかし、もしこのことが為され、そして見られたということが信じられず将来キリストが再臨し、見られるであろうことが望まれないなら、終わりなしに見られるべきキリストに到達しないであろう。

しかし、あの至高の、言詮を絶した、非物体的・不可変的な本性を、知解力をとおして何とか認めるべきことに関しては、人間の精神の眼差しが信仰の規則によって導かれるときこそよく練習するのである。それは人間自身がその本性において他の動物よりも優れている点で、また魂の他の部分よりも優れている精神そのものにおいてなすのである。この精神に不可視的なものの或る種の直視が許されている。また、いわばより高く内的な場所に栄誉をもって司るこの精神に、身体の感覚は判断されるべきすべてのものを告知する。神以外にこの精神よりも高く、そして精神を服従させ指導すべきものは存在しない。

三位一体の根拠に関する説明が分からない読者は、聖書に見いだされる事を信じるよう努めなさい。信仰を追い求め、信仰に立ちなさい。神以外に身体の感覚から精神に告知されるすべてを判断するものはないと私は言いたい。

35）わが魂の眼ざしは罪のゆえに真理を見ることはできない。（27：50）

人間は罪のゆえに神を見ることができないことを告白する。

しかし、私が語ってきたこの多くのことにも拘わらず、あの至高の三位一体の言詮を絶したものに適しいことを少しも語らなかった、と敢えて表明する。だがむしろ、神の驚くべき知識は私の弱さを超えており、私はそれに達し得ざる（詩138：６）ことを告白する。

我が魂は、良きサマリア人によって旅籠屋に運ばれ半死半生になっている。我が魂が、公正を見ることができる光に眼を固着させれば、「神の御言の生誕が神の賜物の発出とどのように異なるか」見るであろう。聖霊は父から生まれたと言わず、発出したと言われるから、父と子の御霊は、父と子の或る実体を共にする交わりである。しかし、わが魂は、このことを透明、明白に見るために、眼差しをそこに固着することはできないのである。私は自分に不可能なことを知っている。

それにも拘わらず、三位一体御自身が、わが魂に、わが魂の中にある三つを示された。その三つにおいて、わが魂は、わが魂が未だ眼を固着させて観想し得ない至高の三位一体の似姿を認識する。三位一体御自身は、我が魂の中に真の言葉が我が魂の認識から生まれる時、つまり、私たちが知っているものを語る時、存在することを示された。この真の言葉は、たとい、各国語が意味表示する言葉を発せず、またそれを思惟しなくとも、存在する。

ところで、私たちの思惟は私たちが知っているものから形成されるのである。また、

思惟する人の眼差しに、記憶が保持していたものに全く似ている思惟の似姿がある。この二つを、いわば親と子のように第三の意志あるいは愛が結合する。この意志は、誰もその本質や性質をまったく知らないものを意志しないから、思惟から発出する。しかも、意志は思惟の似姿ではなく、したがってこの叡知的なものにおいて、生誕と発出の区別が明らかになることをなし得る人は認識し見分ける。思惟において見ることと意志を持って欲求し、あるいは享受することは同じでないからである。わが魂よ、汝はそれをなし得た。勿論、人間の思惟に絶えずあらわれる物体的な類似の雲に囲まれて、ほとんど汝が見なかったものを十分な言葉で解明し得なかったし、解明し得ない。

しかし、汝自身ではないあの光が次のことを汝に示す。物体の非物体的な類似と、それを点検して知解力によって観る真なるものとは別である。このことや他の同様に確かなものを、あの光は汝の内なる眼に示したのである。だから汝が眼差しを固着してこの真理を見ることができないという理由はどこにあるのか。それは汝の邪曲（よこしま）のうちにあるのではないだろうか。だから汝のすべての罪に恵み深くあるお方を他にして、誰が汝の疾患を癒し得るであろうか。それで、私はこの書を論議によらず、祈りをもって閉じたい。

要点は次の通り。聖霊が父と子の交わりということを十分に説明できないけれども、私の魂の中に真の言葉が私の魂の認識から生まれる時、つまり、私たちが知っているものを語る時、三位一体の似姿を認識する。聖霊が生まれたのではなく発出することが、意志の働きから認識できるが、人間の思惟に絶えずあらわれる感覚的なものに遮られてしまう。精神の眼差しが真理を見ることができないのは、人間の罪が原因である。

36）この書に書かれたものが主に由来することを祈る。（28：51）

三位一体論を閉じるにあたり、アウグスティヌスの言葉と祈りが記されている。

われらの神、主よ、あなたにおいて私たちは父と子と聖霊を信じます。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」（マタ28：19－20）とイエスが言うのは、あなたが三位一体の神だからです。主なる神よ、あなたは主なる神ならざるものの名において、私たちがバプテスマを受けるようにお命じになりません。もし、あなたが、一つなる主なる神でいるように、三位一体でなければ、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。」（申命６：４）と神の御声で語らないでしょう。またもし、あなたがペルソナの区別なく父なる神御自身であり、あなたの御言なる御子イエス・キリスト御自身であり、あなたがたの聖霊であるなら、真理の書において、私たちは、「神が御子を遣わされた」（ガラ４：４、ヨハ３：17）と読まないでしょう。また、独り子なるあなたよ、あなたは聖霊について、「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊」（ヨハ14：26）、また、「父のもとから出る真理の霊が来るとき」（ヨハ15：26）とは言われないでしょう。私は出来る限り、また、あなたが

私に可能ならしめる限り、私の注視力をこの信仰の規則に向けて、あなたを尋求いたしました。そして、私が信じましたものを知解力によって見ようと欲し、多くのことを論じ、かつ労苦いたしました。

わが主なる神よ、わが一つなる希望よ、私に耳を傾けてください。あなたを問い求める力をお与えください。あなたは私があなたを見出すことが出来るように創造されました。いよいよ深く豊かに見出すようにという希望をお与えくださいました。あなたの御前こそ、わが力、そしてわが弱さがあるのです。わが力を守りたまえ。わが弱さを癒したまえ。あなたの御前こそ、わが知とわが無知はあります。私はあなたを想起し、知解し、愛したいのです。私を完全に再形成するまでは、この想起、知解、愛の三つの賜物をわが裡（うち）に増してください。私はあなたの御言葉を宣べ伝え、あなたを讃美するためにのみ語りたいのです。

しかし、多くのむなしい思念が私にはあります。少なくとも私の考えと私の良心がそのような空しい思念から守られ、あなたの保護のもとにあるようにしてください。私たちがあなたの御許に到達します時、「私たちが語り、しかも到達しない」ような多くのことは止むことでしょう。あなたは一つに留まり、「神がすべてにおいてすべてとなられる」（一コリ15：28）でしょう。私たちは終わることなく、一つにいますあなたを讃えつつ、一つのことを語るでしょう。そしてあなたにおいて私たちは一つにされるでしょう。

主なる一つの神よ、三位一体なる神よ、この書において私が語りましたすべてのものはあなたに由来することを、あなたに属する人々が認識しますように。そして或るものが私から由来しますなら、あなたとあなたに属するものよ、ゆるしてください。

アーメン

聖書にある三位一体を表す中心的な言葉を挙げ、神を問い求め労苦してきたことを語る。旧約聖書の次の言葉、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。」（申命６：４）は、三位一体の神が一つの神であることを示す代表である。アウグスティヌスは、御許に到達してすべてが明らかになるまで、空しい思念から守られ、さらなる探求の力が与えられるよう祈る。

【付録】引用文献・注

１　ラテン語「生まれながらの才能を有する」の意

謝辞

最後に、筆者が聖書の学びを始めた頃、三位一体論に関心を導いてくださった岡本不二夫牧師に感謝します。長い年月に渡り、多くの障害を持った人々との交流が、私の三位一体論に対する今も変わらぬ探求の原動力になっています。様々な交流の機会を与えてくださった

福祉施設関係者、教会関係者、大学関係者のみなさま、そして家族に心より感謝します。特に、幼少からキリスト教に親しむ妻の目に見えない支えに心より感謝します。

Summary

A Study on Augustine's Concept of the Trinity and Social Welfare
— Study Note 3—

Shuichiro Kunori

This paper is one in a series of discussions on the interactions between Augustine's Trinity Theory and social welfare. This paper will elaborate on the final discussion of the Trinity (vol.15, chapter 22-28). The fundamental differences between Augustine's model and God will be discussed along with the following two questions: how the Son was born from the Father, and how the Holy Spirit was emitted from the Father. Many readers might be surprised at his description of the different ways of "birth" between the Son and the Holy Spirit, which he explains through the analogies of "understanding" and "will" in the human spiritual model. In this paper, in order to clarify the scope of his theory, his discussions in volumes 9 through 15 have been analyzed by analogy, metaphor, and fit theory, all three of which are well-known God recognition methods. Although Augustine found several descriptions of "spiritual trinity" that were derived from the human senses, he could not say that even one of them was an actual image of God. This situation derives from a psychological understanding of "sin" illustrated by Paul in the Bible, which uses the human spirit as a metaphor for God. Augustine also pointed out that the ways in which the Bible talks about God can be understood as dependent on human growth, and this observation can be seen as a prototype of fit theory. In this way, Augustine's psychological Trinity theory is in perfect harmony with faith and reason. Therefore, application of Augustine's Trinity theory can be expected to improve the quality of social welfare.

Keywords Augustine, the Trinity, Social Welfare

（2016年11月10日受領）